撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

経ヶ岬灯台

京都府京丹後市丹後町

京都府北部に位置する丹後半島最北端の経ヶ岬。日本海を望む高台の駐車場から北側に視線を移すと、木々に覆われた断崖に灯台の塔頂が見える。一八九八年に初点灯した経ヶ岬灯台だ。駐車場から一五分ほど遊歩道を辿っていくと急に視界が開け、雪のように白い灯台と対面することができる。海抜一四〇㍍からの眺望は、晴れていれば能登半島まで広がる。眼下に迫るのは、無数の玄武岩が柱のように林立する柱状節理の奇勝だ。一帯は丹後天橋立大江山国定公園に指定されている。

日本の灯台建設は、江戸期から明治初期にかけてはお雇い外国人の技術指導に依存していたが、一八八一年に建設された福井県敦賀市の立石岬灯台を嚆矢として日本人技術者のみによる灯台整備が可能となった。経ヶ岬灯台も明治政府逓信省の技手たちによって建設された。資材は現地調達。灯台下の海岸には、石材を供給した石切り場の跡が残されているという。初点灯後も付属工事が継続され、最終的な完成まで五年を要した。

使用されているレンズは、国内でも数少ない第一等※フレネルレンズ。数トンもあるこのレンズを動かすのはフランス人技術者のプール・デーユが発明した水銀槽式回転機械だ。パリ万国博覧会で展示されたものを購入して、この灯台に設置した。

塔高は一二㍍と小振りだが、海面からの灯火標高は一五〇㍍に近い。ここから敦賀、舞鶴などの重要港湾を行き交う船に灯光を送っていた。美麗というより瀟洒という形容が相応しい佇まいだ。その塔体が陽の光を反射して白亜の輝きを柔らかく放っている。この可憐な灯台はその貴重さが認められ、二〇〇八年に近代化産業遺産に指定された。

お雇い外国人の英国人建設技師R・H・ブラントンが手掛けた半円形の基礎に、資材を積み上げる構造を踏襲している。表面は無骨な石材の質感を残すコブ出し仕上げで、当時多くの石造灯台で採用された。1959年に職員の常駐が廃止され、居住施設（上写真内赤い屋根の建物）も閉鎖されたが、倉庫として残された。こちらも石造り。レトロな趣のある建屋だ。

※フレネルレンズ：1822年にフランスの物理学者オーギュスタン・ジャン・フレネルが考案した、特殊なカッティングを施すことで大きさや厚みを抑えたレンズのこと。一番大きい1等から順に6等まである。日本国内の第1等フレネルレンズは経ヶ岬灯台を含め現在5カ所に残る。